

## 編集後記

### Afterword

「駒澤大学心理学論集」は今年度で第25号となり、Anniversaryの年を迎えました。この25年で心理学研究室にもいろいろな変革があり、社会情勢に即して対応し、発展してまいりました。詳細につきましては、第21号の心理学研究室設立50周年記念号にて掲載しておりますので、ご覧ください。

25年間で心理学界に関わる最も大きな社会情勢の変化は、心理臨床のニーズが高くなったこと、それに伴い臨床心理士と公認心理師という心理学の資格ができたことでしょうか。心理学科・心理学専攻において、カリキュラムも、教員編成も、ふたつの資格が受験できるような対応がとられました。コミュニティ・ケアセンターの設立も大学院生の育成だけでなく、「地域貢献・地域連携」という25年前には考えられなかった新たな大学の使命を心理学研究室にもたらしめました。もうひとつの大きな社会情勢の変化は、新型コロナウイルス（COVID-19）に伴う影響でしょう。授業も会議も「対面」「オンライン」「ハイブリット」という言葉とともに、形態を柔軟に変えて実施されるようになりました。25年前どころか、3年前ですら考えられなかったことでした。

この先25年、第50号を発刊する時代までには、どのような社会情勢の変化があり、心理学研究室の発展があるのでしょうか。どんな変革が訪れるとしても、新しい教員が着任していくとしても、初代秋重義治先生の時代から流れている駒澤大学心理学研究室の伝統は繋げてほしいと切に願います。

今年度も実験や調査がコロナ前のように順調にすすむことができない状況であったと思います。そのような状況の中で、本号にご寄稿いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。また、助手の嵩原広宙先生には、全般的に心強い的確なサポートをしていただきました。心より感謝いたします。

(編集委員長：永田陽子)